The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 『狭衣』の一品宮 : 構造論の試み |
| Author(s) | 片岡, 利博 |
| Citation | 語文. 1977, 33, p. 1-9 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/68633 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 『狭衣』の一品宮

## ――構造論の試み――

片岡利博

本稿は、物語『狭衣』を構成する叙述のうち、巻三の中間部（注1）（狭衣と一品宮との結婚に関する物語が語られている部分）を中心に、それとかかわりをもつ若干の叙述を対象として、〈筋〉の抽出を行ないながら、叙述の〈構造〉を記述しようとする試みである。従来、構成論や構想論として提出された論考は、本稿に多くの示唆を与えてくれたが、本稿はテキストの叙述のみを対象とする点でそれらの論考とは立場を異にする。あえて〈構造〉というような不安定な用語を用いたのも、そのことを明らかにしたかったからである。従来の構成論や構想論が、作者を重視し、創作過程や成立論など、文芸の外在的な問題と結びつきやすい性質をもっていたため、それらの論考との用語の混乱をさけたかったのである。

〈筋〉という語は、ごく普通に用いられる用法に従ったつもりであるが、一応、「因果関係によって連なる叙述の流れ」と定義しておく。以下、叙述の相互関係をたどりながらいくつかの〈筋〉を抽出し、〈筋〉とそれを構成する叙述との関係や〈筋〉相互の関係などを記述し、この部分の叙述の展開のあり方を考えてみようと思う。

テキストは日本古典文学大系によったが、引用に際しては私に句読を改変し、最少限の注を括弧に入れて付記した。引用文のあとに付した漢数字はテキストのページ、アラビア数字は行を示す。なお、本稿では、物語名を『狭衣』、男主人公名を狭衣と表記して、区別した。

## 一

一品宮が物語に登場し、これに関する物語が展開するのは巻三の中間部からであるが、これに先立つ巻三前半部の叙述は次のように整理される。

Ⅰ　狭衣帰京。出家の望みと源氏宮への止まぬ思慕。故飛鳥井女君への思いも添い、遺児忍草を捜そうと決意する。（二一七―1～二二一―8）

Ⅱ　狭衣、嵯峨院若宮と女一宮とを後見。宮たちを見るにつけ、女二宮への思いがつのるが、宮はとりあわない。（二二一―9～二二八―2）

Ⅲ　洞院上、今姫君を入内させんとし、狭衣に後見を依頼。母代との対話で飛鳥井女君の伯母常磐尼の居所を知る。（二二八―3～二四一―8）

Ⅳ　狭衣、常磐尼を訪れ、忍草が一品宮に養育されていることを知る。（二四一―9～二五〇―3）

Ⅴ　宰相中将、今姫君に忍び入り、入内沙汰止み。（二五〇―4～二五五―7）

さて、Ⅲ・Ⅴは巻一での今姫君の叙述をうけて、烏滸話の〈筋〉を形成する叙述であるが、これとは別に、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳの叙述ももうひとつの〈筋〉を形成する。即ち、巻二巻末で狭衣が飛鳥井女君の兄に会い、女君の生存を知るが、Ⅰではその死が伝えられ、狭衣は忍草を捜そうと決意する。Ⅲに入ると、常磐尼の居所が狭衣に伝えられ、Ⅵで狭衣はこの尼を訪れる。そして、忍草が一品宮のもとに預けられていることを知るのである。Ⅰの「忍草を捜す」という狭衣の決意が、Ⅲ・Ⅳを経て、狭衣を一品宮に接近させることになり、以下、一品宮の物語に展開していくという〈筋〉である。

このように、巻三前半部の叙述のうち、Ⅰ・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴは、ひとつ、または二つの〈筋〉の形成に与っているが、Ⅱはどんな働きをしているのであろうか。一品宮の物語中に若宮の袴着のことがあり、狭衣はこのついでに忍草の袴着を一品宮に提案し、宮の態度を硬化させるという叙述がある。これはⅡとの因果関係を認めることができる。しかし、以後の展開においてⅡの関与する〈筋〉は他にないであろうか。

そこで、一品宮の物語中にある若宮と女一宮との叙述をたどってみると、そこでは必ず狭衣の女二宮への思いが語られていることに気づく。たとえば、

(A)　六月十日余り、いと暑き昼つ方、（狭八）一条の宮にて若宮具したてまつりて、端つ方に涼み給ふに…（中略）…若宮を見たてまつるたびごとに、（女二ガ）さておはせましかばと思されぬ折はなかりつるを、いとどこのほどは（女二ヲ）かけぬ暇なくあはれに悔しき御心の中なり。（二六六―8）

とあって、狭衣は前栽の大和撫子に事寄せて女二宮に文を送る。続いて

(B)　一品の宮の（婚儀ノ）御事は、八月十日比の程と定まりぬ。…（中略）…みづからの御心にはいといみじうのみ思し嘆かれて、一条の宮にのみ籠り居給て、若宮と起き伏し語らひ給て、かなはざりける世の中をうらめしう思すまゝに、（女二ガ）たゞ今しばしかはらぬ様にておはせましかば、かゝる事（＝一品トノ結婚）を人思し寄らましやなど思すに…（略）（二六七―4）

とあり、女二宮に文を送る。以上(A)(B)二例においては、若宮との対面から狭衣の女二宮への思い出を語るという類型的な〈筋〉が見られる。女一宮の場合はどうか。若宮の袴着の後、狭衣が女一宮を慰問する条に、

(C)　ほのかなれど、さ（＝女一）にやと漏り聞ゆる御けはひの、入道の宮（＝女二）の同じ様にやと思ゆるに、物あはれにて（女二ガ）思し出でられ給。（二九三―2）

とあって、以下、女二宮への思慕の叙述が続く。この(C)の場合も、やはり(A)(B)と同様の〈筋〉が見られる。若宮、あるいは女一宮との対面が狭衣の女二宮への思いを呼びさまし、以下女二宮の叙述が続く、という〈筋〉は、巻三中間部以後、頻繁にあらわれるが、こうした〈筋〉が最初にあらわれたのはⅡの叙述においてであった。狭衣と女二宮との関係は、巻二前半部の女二宮の物語の後、どうにも埋めようのない深い溝を生じてしまっていた。そんな二人の間が、

「若宮と女一宮とを狭衣が後見する」というⅡの叙述によってかろうじてつなぎとめられ、右に見たような類型的な〈筋〉によって狭衣と女二宮が再び接触する可能性が与えられたと考えられる。

この類型的な〈筋〉によって狭衣と女二宮との接触がくり返し語られるようになりはしたものの、二人の関係を語る叙述は常に同じところにとどまっていて、それらの叙述が〈筋〉を形成することはない。即ち、狭衣は、宮を出家に追いやった過去の行動を悔い、再三再四、宮に迫るが、常に宮はそれを頑なに拒否するばかりで、巻二以後の二人の関係はいずれの方向へも進展してはゆかないのである。(注2)藤井良晃氏が女二宮を評して、「ひたすら仏を念ずる虚ろな聖人」と言われたのは、これらの叙述の「〈筋〉の停滞」という〈構造〉によるのである。これはちょうど巻一巻二における源氏宮と狭衣の関係に似ている。源氏宮の叙述の〈構造〉を記述することは本稿の枠から外れるので省略するが、尾上八郎氏が源氏宮を「ただ美しい木偶」(注3)と言われ、半田尚子氏が「源氏宮物語は発展の可能性を完全に萎縮せしめた発端を以て最後まで形成されてゐる。」(注4)と論じられたのも、やはり源氏宮の叙述が常に同じところにとどまっていて〈筋〉を形成しないという〈構造〉をさして言ったものである。

しかし、ここで女二宮の叙述と源氏宮の叙述との間のこうした類似を指摘するだけでは〈構造論〉としては十分ではないだろう。巻三前半部から中間部にかけて、先にみたような類型的な〈筋〉を形成して女二宮が物語の表面にうかびあがってくるのと対照的に、これまでしばしば点出されてきた源氏宮の叙述がふっつりと姿を消してしまうことは注意されねばならない。このことは後に述べる。

## 二

前節では、若宮・女一宮の叙述から女二宮の叙述へと展開する類型的な〈筋〉の存在をまず指摘し、そうした筋を形成しつつくり返される女二宮の叙述は、相互に因果関係が認められない(「〈筋〉の停滞」)という〈構造〉を見出した。

ところで、このように発展の可能性のない女二宮の叙述と、一品宮の叙述とは相互にどのようにかかわり合っているかを考えるのが本節の課題である。

まず一品宮の物語の発端となる垣間見の場面を見てみよう。そこには次のような叙述が見られる。

(D) 御前の方を見入れ給へれば、御殿油消え方にまたゝきて、奥は暗うて物も見えず、こゝかしこ人はあまた寝たりと見ゆれど幼き人(=忍草)はいづれとも見えず、臥したらん所も知らねばたどり寄らむ方もなくて、つく〳〵と見入れらるゝにも、弘徽殿の南の戸口はまづぞ思出られける。(二五七—3)

ここにいう「弘徽殿の南の戸口」とは、巻二に語られた女二宮の物語の発端となった垣間見をさす。この場面は、「(狭ガ)忍びたる所より夜深く帰り給て、一条の宮へおはするに、この宮の御門いと疾くあきて……」(二五六—12)と語り始められるのであって、若宮を訪れんとする狭衣が一品宮邸に立ち寄ったという設定になっており、そのために狭衣の心に「まづぞ」女二宮との過去が思い出されたものと解される。若宮の叙述から女二宮の叙述へと展開する先述の〈筋〉とよく似た〈筋〉である。

さて、叙述は次のように続く。

(E) 思ふまゝなるは、我ため人（＝一品）のため、あぢきなく、いとほしうも悔しうもあるわざぞかしとも、いくらも年の積りならねど思ひ知られ給事なれば、煩はしうてやはら出で給ふに…（略）（二五七―7）

ここの狭衣の反省は、(D)の叙述との関係から考えても、女二宮との一件の経験にかんがみてのものであろう。実際、女二宮の物語の中にはそうした反省の叙述があった。（一三二―4～10）

さて、狭衣がこのように反省して一品宮邸を立ち去ろうとした矢先に、この現場は太政大臣家の権大納言に目撃され、あらぬ噂をたてられることになる。

垣間見の場面の叙述(D)(E)には、女二宮の物語をふまえた叙述が右のように見られ、女二宮の物語の発端と通じるような形で一品宮の物語は始められる。以下の叙述の中から、これと同じように、女二宮の物語をふまえた部分を拾い出してみると、次のようになる。

(F) いでや。かゝればさしも殊のほかにのたまふなりけり。さはありとも（狭ハ）親王達をし何とも思ひ聞えぬ人を。（二五八―8）

これは大納言がさきの目撃を一品宮の中納言の君に告げる条である。この「親王達……」とあるのは、かつて狭衣が嵯峨院の姫宮たちの降嫁を拒んだという、女二宮の物語をふまえた叙述である。この大納言は「ものいひさがな」い性格の人であり、狭衣に対する敵意は「思ひ聞えぬ人」という言い方に敬語を欠いている点からもうかがえるが、さりとて「親王達……」を単なる中傷といってしまってはならない。なぜなら、次にあげる、一品宮の内侍乳母のことばにおいても、やはり女二宮の物語をふまえて、狭衣の一品宮への接近に難色を見せているからである。

(G) 嵯峨の院、宮達をうち変り（狭ニ）あづけさせ給へど聞き入れさせ給はぬに……（略）（二五九―7）

ここにあげた(F)(G)は、巻二に語られた女二宮の物語を背景にしてはじめて意味をもつ叙述であり、一品宮と狭衣の結婚を妨げる方向に進展する〈筋〉を形成している。

(H) 年頃もこの御事（＝一品）を思して、いとひが〳〵しきさまにて思し離るゝ事もあるなりけりと（堀ハ）思す。（二六一―15）

これは狭衣と一品宮の噂を耳にした堀川大殿の心中を語る叙述であるが、「いとひが〳〵しきさまにて……」は女二宮の物語をふまえた叙述である。これは、一旦、狭衣の執拗な抵抗に会い、直截に宮との結婚への〈筋〉を形成するわけではないが、

(I) なき事にてもある事にても、かばかりの人に名を立てたてまつりて、音もせでやみなんは、いとゞ不便のことなり。（二六三―9）

という大殿の配慮のもとに、宮の降嫁を奏上するという方向に展開する。

(J) （帝ハ）さき〳〵の事どもを聞かせ給へば、かの（＝狭ノ）心に少しも物憂からん事をば（堀ハ）更にすゝみ言はざなるを、大殿の、かく方々にねんごろに言ふは、かの（＝狭ノ）自らの気色にしたがふこそはあらめとおし量られ給ぞ、頼もしう思し召されける。（二六四―14）

奏上をうけた今上は、女二宮と狭衣との過去の経緯を思って、妹一品宮の行末を様々に案じるが、結局は(J)の叙述をへて、この結婚に同意するのである。

この(H)・(I)・(J)の叙述は、(F)・(G)とは逆に、一品宮との結婚を進

める方向に進展する〈筋〉を形成しているのであるが、ここでも女二宮の物語が背景となって、〈筋〉の形成に関与している。

このように紆余曲折を経て、宮との縁談は進められていく。狭衣の心はもとより晴れず、その慰めに若宮のいる一条の宮に出向いてゆく。これが女二宮への思いにつながってゆくという〈筋〉は前節に見たとおりであるが、縁談の進行につれて、女二宮の叙述の方に一品宮との縁談の〈筋〉が影響してくるようになる。さきに引用した(A)の叙述の中に「いとゞこの程はかけぬ暇なく」とあるのはその例で、(B)の「今しばしかはらぬ様にておはせましかば、かゝる事を人思し寄らましや」というのも同様である。このように狭衣の心理の叙述にまで、一品宮と女二宮との交錯が見られるようになると、一品宮の物語における女二宮の位置は大きいと考えねばならず、単なる叙述の背景というような断片的なとらえ方では十分ではないだろう。狭衣の女性遍歴を狭衣の側から語ることの多いこの物語においては、狭衣の心理は〈筋〉と密接なかかわりをもつことが予想されるからである。

一品宮との初夜の叙述を次に見てみよう。三十をすぎた宮は狭衣にうちとけない。そんな宮を前にして、狭衣は思う。

(K) 独り寝の明かし難かりつるも恋しうて、憂きは例もとありしと有難うこそありけれ。思ふ事一つによりて、何事を飽かずぞと思ひ聞えて、（女二カラ）つらき物におもひ果てられたてまつりて過ぎにけん。その報ひ必ずありなんと思つる。たゞ今宵の心の中に報はりぬる心地し給。（二七五―1）

この叙述においては、女二宮と一品宮が対比して描かれている。そして、一品宮との不本意な結婚は女二宮への過去の行動の「報い」であると、狭衣は考えるのである。(注5)

このあと、狭衣は宮邸を「夜深う出」て、若宮の一条の宮に赴く。これは先述の〈筋〉で女二宮の叙述に展開するが、ここで狭衣は、一品宮への後朝の文をさしおいて、まず嵯峨院への文を送る、という叙述が見える。（二七五―12～13）　これも女二宮と一品宮が対比的に描かれている叙述の一例となる。

四日の朝の叙述（二七九―10～15）にも(K)と同様の心理描写が見えるが、略す。

さて、気の重い夫婦生活の中で、狭衣は宮邸で忍草に会い、その夜、宮との夫婦仲は一層疎くなる。若宮の袴着の後、狭衣が女一宮を慰問する条は(C)にも引いたが、そこでは次のように語られる。

(L) もて離れたりける御宿世どもかな。心ゆかずながらも（一品トハ）逃れ難かりければこそは思ひかけざりし濡衣も干し佗びて誰も思しなりにしか。など過ぎにし方の隠れ蓑（＝女二ヲ垣間見タコト）を見あらはす人のなかりしぞ。さるは、かの心おくれたりし懐紙のついでにはもて騒がれぬべれりけるものを。（二九三―4）

この叙述においては、明確に、一品宮との「逃れ難かりけ」る宿世と女二宮との「もて離れたりける」宿世とが、対比的に語られている。ここにいう「もて離れたりける宿世」とは、巻二における女二宮の物語の展開そのものであり、「逃れ難かりける宿世」とは、これまで見てきた一品宮の物語の展開に他ならない。その意味では、(L)は『狭衣』の叙述の〈構造〉を明かしたものといってよいだろう。さきに見たように、一品宮と狭衣の結婚への〈筋〉の中には、

女二宮の物語をふまえた叙述が処々に見られた。そして、物語は、折にふれて女二宮を叙述の表面にうかび上がらせ日増しにつのる狭衣の女二宮への思いを語りながら、〈筋〉の方はそれとはうらはらに、一品宮との愛のない夫婦生活・女二宮とのどうにもならない隔絶、という方向に展開してきたのであった。こうした展開が狭衣をして皮肉な宿世を思わせ嘆かせる。そして、この皮肉な宿世を、狭衣は、「思ふ事一つによりて」「つらき物におもひ果てられたてまつりて過ぎて」きた女二宮に対する過去の行動の「報い」であると考えるのである。

巻三前半部のⅠ・Ⅲ・Ⅳから一品宮と狭衣の不本意な結婚に展開していく〈筋〉と、Ⅱをはじめとして以下処々に見られた女二宮の発展のない叙述との関係は、(ｋ)および(L)に見られた狭衣の心理の叙述において、明らかになった。一品宮の物語は、狭衣の女二宮に対する過去の行動の「報い」として物語であったといってよいだろう。

従来の構成論や構想論が、一品宮が狭衣の恋の相手ではないということを根拠に、この物語を飛鳥井女君の物語の後日譚として処理し、一品宮を忍草の育ての親としてしか扱わなかったのは、この物語に対する無理解を示しているといわねばならない。また、この物語の中に点在する女二宮の叙述も、単に女二宮の物語の後日譚であるにとどまらず、右にのべたように「報い」の物語としての一品宮の物語の形成に重要なかかわりをもっているのである。

さきに保留しておいた源氏宮と女二宮との類似の問題はこのこととかかわっている。巻三の女二宮の叙述と同様、巻一巻二における源氏宮の叙述は「〈筋〉の停滞」をおこしているが、飛鳥井女君の物語や女二宮の物語は、それら源氏宮の叙述においてくり返し語られる「狭衣の源氏宮への思慕」を抜きにしては考えられないのである。狭衣との関係において発展の可能性を失った女性がいつまでも狭衣の心に座を占めて彼の行動を規定し、そのことが狭衣と他の女性との物語の〈筋〉の形成に深くかかわっているという展開のあり方は、『狭衣』の叙述の〈構造〉の類型として注目されてよいと思う。(注6) そして、巻一巻二における源氏宮の叙述と巻三の女二宮の叙述とが、かかる〈構造〉上の類似を見せるということは、『狭衣』全体の叙述の展開において、巻一巻二と巻三との間に大きな屈折があることを意味している。この屈折の様を記述することは『狭衣』全体の叙述を対象とする〈構造論〉における重要な課題となるであろう。

## 三

前節において、巻三中間部に配された一品宮の物語の〈構造〉はほぼ明らかにしえたかと思う。そして、一品宮の物語のこうした〈構造〉と、巻三前半部の叙述との関係も明らかになったと思う。

本節では、巻三以前の叙述の中で一品宮の物語と関係があるといわれている若干の叙述について、検討を加えておきたいと思う。それは、

(1)巻一に見える一条院の姫宮（＝一品宮）の叙述（四〇―10～13）
(2)今姫君登場の際に見える「伯母の尼君」という叙述（八二―15）と今姫君

の二つである。

(1)については、すでに三谷栄一氏が、巻三以後の一品宮の描写と

の間に矛盾のあることを指摘しておられる。[注7]氏は構想論の立場から、巻一前半部を先行作品との関連において論じ、飛鳥井女君の登場によって原初の構想が崩壊したと推理して、この矛盾を説明しておられる。しかし、〈構想論〉の立場からすれば、原初の構想が崩壊したというのであれば、崩壊以前の構想がどのようなものであったかは問題ではなくて、この矛盾を現在ある『狭衣』の叙述の〈構造〉にどのように位置づけるかが問題なのである。もっとも、巻一の方の一品宮の叙述は甚だ短いので、これを矛盾としてとり扱うかどうかは論者の主観によると思うが、確かに、巻一では狭衣の気をひく女性であった一品宮が、巻三では狭衣に疎んじられる女性になってしまっている。このことは、とりもなおさず、巻一の叙述の展開において一品宮の叙述がもつ意味と、巻三の叙述の展開において一品宮の叙述のもつ意味とが異なっているということを示している。巻三の一品宮は、前節に述べたように、女二宮との過去の報いを狭衣に知らせるという〈筋〉の形成に関与するものである。一方、巻一での一品宮の叙述はどうか。飛鳥井女君の物語の中に次のような叙述がある。

(M) かねていみじき心を尽し給、やんごとなき辺どもよりは、（飛トノ）習はぬ草の枕を珍しと思して、その後は宵暁の露けさも知らず紛れ給ふ夜な〳〵積りけり。（七二―1）

ここにいう「やんごとなき辺ども」とは、源氏宮であり、宣耀殿女御であり、一品宮である。一品宮が狭衣の意のままにならない女性であったことは、狭衣が宮に送った歌に、「みごもりながら朽ちやはてなん」（四〇―13）とあることからわかる。源氏宮や宣耀殿女御と共に、一品宮は狭衣が気を許して自由にふるまえる相手ではなかった。このことが狭衣を飛鳥井女君との気のおけない恋にのめりこませてゆく原因となっている。巻一における一品宮の叙述は、こうした〈筋〉の形成に関与するものであって、巻三以後の叙述の〈構造〉とは直接の関係はないと考えてよい。

(2)については、森下純昭氏が「この伯母の尼君が常磐の尼（飛鳥井の叔母）なのであり、従って飛鳥井と今姫君は当初からいとこの関係で人物設定されている」[注8]としておられるが、そうは考えにくい。巻三で今姫君の母代は次のように語る。

(N) その御姉は女院に中納言の君とて侍ひ給ひしを、筑前の前司なにがしの朝臣に盗まれて遠き程までおはしたりしが、守失せて後、尼になりて常磐といふ所におはする。（二四〇―2）

これによれば、常磐尼が筑前に下ったのは、夫に同伴したのであるから、夫の任終えて帰京後、夫に死なれ尼になったものと解される。また、巻二巻末の禅師の君の言に

(O) 比叡の山拝みたてまつらん心深くてなん、筑前の守の北の方離れぬ中と聞き侍りて、それにつきて都の方へまうでにし。（二一二―6）

とあるのは、禅師の君が、筑前守の上京に同行したものと解される。この上京の時期は、

(P) 女（＝飛）泣きこがれて、身を投げてんとて、せがいに出でて侍りけるを、兄の禅師の君、片目悪しき法師、いみじき聖にて侍ける、伯母につきて筑前より上りける、思はざる外に見つけて、常磐に置きたりける。（二四〇―10）

とあることから、飛鳥井女君が道成に盗まれて筑紫に下った時と一致することになり、それは物語第一年の晩秋のこととなる。ところ

が一方、巻一で「伯母の尼君」なる人が世話をして、今姫君が洞院上に迎えとられたのは、これよりも前、同年初秋のことであるから、今姫君登場の時点では筑前守北の方はまだ上京しておらず、またこの人を「伯母の尼君」と呼ぶ言い方も成立しない。従来行われている系図は「伯母の尼君」を常磐尼と同一人物としているが、そうなると右のような矛盾を生じる。巻一の「伯母の尼君」と巻三以後の常磐尼とは別人と考えるべきであろう。

今姫君はどうか。すでに横尾三雄氏の御指摘があるように、この人に関する叙述は分散しているが、一貫した〈筋〉をもっている。(注9) しかし、『狭衣』の叙述全体の大きな流れの中に位置づけてみると、巻一と巻三とでは〈筋〉に対するかかわり方がちがっている。森下氏の説にも見られるように、従来、今姫君は飛鳥井女君との関係ばかりが説かれてきた。その一半は、さきの「伯母の尼君」についての誤解のためであるが、より大きな一半は、巻三の忍草の一件にひかれているためであろう。しかし、巻一における今姫君の叙述まで飛鳥井女君との関係で説こうとするのは無理であろう。むしろ、巻一の今姫君は一貫して源氏宮との対比において語られていると考えるべきであろう。巻一冒頭で源氏宮の素姓が語られたのち、

(Q) 太政大臣の御かたこそ、いかにもいかにもかやうの人(=子供)のおはせねば、いとつれ〴〵に思さるゝまゝに、さりぬべからん人の女もがな。預りてかしづきたてんは、とさへ、あけくれうらやませ給ふ。(三七—5)

と語られるのは今姫君登場への伏線となる叙述であり、こうして登場する今姫君は、源氏宮と同様、堀川大殿の養女であって、狭衣とは、共に、血縁でない兄妹の間柄である。狭衣がはじめて今姫君を訪れ、その痴呆ぶりを目のあたりにしたときの叙述。

(R) 殿の御子とは言ふべくもなかりけり、とぞ見ゆるに、たゞならずや思ひ給ふらん、あやしの心やと、われながら心づきなし。(八八—13)

ここの「あやしの心」を単に好色とか多情とか解するのは当たらない。流布本のテキストが、「様のものと、怪しの心ばへや」となっているように、源氏宮を背景にもつ表現、即ち、血のつながらない妹と見れば途端にいとしいと思う心が生じるのを、「あやし」というのである。かように、巻一の今姫君は、源氏宮との対比でとらえられるべきものであって、今姫君と飛鳥井女君とを関係づける叙述は巻三に入ってからしか現われない。

以上、巻一に見える二人の人物についての叙述を検討してみたが、一品宮の物語の展開を予測させるような叙述は見られない。むしろ、それらは一品宮の物語というよりは、飛鳥井女君の叙述や源氏宮の叙述とのかかわりのほうが濃厚であって、また、さればこそ、これらの叙述が巻三での一品宮の物語の伏線としていきてくるのである。

本稿は、はじめに述べたように、対象をごく限られた叙述に限定せざるをえなかった。〈構造〉という語を、本稿では、叙述の「展開のあり方」という程の意味で用いたつもりであるが、いずれ、〈構造〉とは、全体とそれを構成する部分との関係、でなければならず、『狭衣』全体の叙述を対象とした叙述の〈構造〉が記述されねばならない。ここにとりあげた一品宮も、この後、狭衣の登極をへて、宮の入内拒否、出家から死という展開を辿る。こうした展開を

も含めた叙述の中で、「報い」の物語としての一品宮の物語をどのように位置づけるか、先述の巻一巻二から巻三にかけての屈折した展開をどのように考えるか等、課題は山積している。稿を改めたい。

注(1) 流布本では「巻三之中」とする。

注(2) 「狭衣物語における主要人物の考察（『東洋大学文学論藻』昭二九・一一）

注(3) 『校註日本文学大系　第五巻』解題（昭二一・八）

注(4) 「狭衣物語の構成」（『文芸研究』昭三〇・一）

注(5) この(K)にみえる「憂きは例も…」は、(B)のあとに続く女二宮の叙述の中の次の一節をふまえている。

宮、つくづくと思し出づる事多かるなかに、この（狭ノ歌ノ）末越す風の気色は、すぎにし（狭が女二ニ忍ビ入ッタ）夜の心もかやうにてやと、少し御目とさまらぬにしもあらで、筆のついでのすさびにこの御文の片端に、

夢かとよ見しにも似たるつらさかな憂きは例もあらじと思ふに（二七二―2）

この叙述においても、女二宮は、狭衣の一品宮に対するつれない仕打ちを、自分に対する過去の狭衣の行動と比べている。(K)の中の「つらき物…」は、この歌をふまえた叙述である。

注(6) 『狭衣』の女主人公は誰かという問題は、『狭衣』が女たちの人物造型を等閑にしているという評価と共に、しばしば論じられているが、こうした〈構造〉を思い合わせれば、狭衣に見合うような位置にある、只一人の女主人公というものはなくて当然だというべきであろうし、女たちが生き生きと描かれなかったのも当然だといわねばならない。一方、男主人公狭衣の性格が、石川徹氏の言われるように、「消極的にぐづぐづと世に存へた哀しい優柔不断の男」（『日本古典全書』解説五一ペ）であると感じられるのも、かかる〈構造〉に起因するところが大きいと考えられる。

注(7) 「狭衣物語の構想と構成」（『国学院雑誌』昭四三・一一）

注(8) 「古本住吉物語と狭衣物語――飛鳥井の物語との関係――」（『語文研究』昭四八・八）

注(9) 「『狭衣物語』の一試論――今姫君物語考――」（『平安朝文学研究』昭四一・五）

（本学大学院学生）